



シビルサポートネットワークニュース

NPO法人シビルサポートネットワーク

2015年4月30日

2015年春季号

本号の内容

- 春に語る
 - ・CSNの次世代を託す-段階に世代は参入してくれるか
- 事業報告
 - ・手城町会地域防災講演会報告
- 活動報告
 - ・平成27年度CSN総会報告
- トピックス
 - ・CSOP意見交換会報告
- CSNのうごき

□ 春に語る □

CSNの次世代を託す - 団塊の世代は参入してくれるか？

事務局長 高橋 肇

わがCSNの活動目的のひとつに、団塊世代にリタイア後のステージとしてこのNPOを活用してもらいたいとの思いがあった。では、設立10年を

経たいま、その願いはかなえられたのだろうか？

CSNの正会員は現在17名、そのうち設立後に迎えたメンバーは7名である。いわゆる団塊世代は昭和22・23・24年生まれなので、現在68~66歳になる。7名中、この年齢の該当者は、1名のみ！つまり、団塊世代の受け皿となりえていない、といえる。

団塊世代が、ボランティアやNPOの世界に(予想に反して)入ってこないのは、CSNに限ったことではなく、全般的な傾向のようだ。

この道の先駆者であるさわやか福祉財団の堀田力氏も、かなり以前から「団塊の世代の参入がない」と指摘されている。

たまたま、先月わたしの地元で堀田氏の講演があった。

残念ながら聴講できなかったが、「地域はあなたを待っている-団塊・シニア世代に期待する」というテーマや、「心は地域で絆や人間関係を求めているのに、それが出来ない団塊世代が一番孤独でかわいそうです。」という参加者の感想から、やはりいまでも状況は変わっていないと感じた。

団塊世代は、いまどこに？

では、団塊世代は、いまどこでなにをしているのか？

4月13日に開催された第12期総会において、辻田代表から、CSNの後継者問題を真剣に考えなければならない、との問題提起があった。

つまり、次世代に事業をうまく引き継いでいくためには、まず団塊世代に託し、その間にいま60歳ぐらいの方々に年金受給の65歳をめどにNPOへの助走を始めていただくのが順当と考えられるのである。

それだけに、CSNにとっても、団塊世代の現在の動向をぜひ知っておきたいところだ。

ここで、団塊世代の人数について、ちょっと復習しておこう。

下表の赤字部分が団塊世代で、約800万人をかぞえる。ちなみに、戦争の影響をまろに受けたと考えられる1946年生まれは約158万人で、1年にして約100万人以上が増えたことになる。

生 年	現在年齢	人数
1946年(昭和21年)	69歳	158万人
1947年(昭和22年)	68歳	268万人
1948年(昭和23年)	67歳	268万人
1949年(昭和24年)	66歳	270万人
1950年(昭和25年)	65歳	234万人

約
800
万人

この 800 万人がいかに巨大な数字かということ
は、最近の 3 年間の出生数と比較するとなおよくわ
かる。

2012 年(平成 24 年)	3歳	104 万人	約 300 万人
2013 年(平成 25 年)	2歳	103 万人	
2014 年(平成 26 年)	1歳	101 万人	

事前予測では、社会参加希望率が高い

この巨大人口団塊が社会経済にもたらす影響に
ついて、従来から様々な予測がされている。

とくに、この世代のトップランナーが定年を迎え
る 2007 年は、一斉退職による人材不足や技術の伝
承断絶などがおきるといわれ、「2007 年問題」とし
て注目されたこともあり、動向調査結果がいくつも
発表された。

それらによると、団塊世代は退職後、地域社会と
接点を持ち、地域において何らかの社会的役割を持
つことを希望するひとが、6~7 割にも及ぶことが
明らかにされている。

国勢調査の統計によると、男性就労者は 60 歳や
65 歳で急に減少するわけではなく、60 歳から徐々
に少なくなり 67 歳で約半分になる(=退職)そう
だ。

そこで、問題を 07 年とか 12 年と単年度でとらえ
ないで、団塊世代の最年長(1947 年生まれ)が 60
歳になる 2007 年から、最年少(1949 年生まれ)が
67 歳になる 2016 年ごろまでの 10 年間で「団塊世
代退職の 10 年問題(2007~2016 年問題)」といった
ほうが適当かもしれない、という意見もある。

(以上、統計局ホームページ「団塊世代をめぐる 2012 年
問題は発生するか?」)。

まさに、現在進行中の問題なので、いま団塊世代
が実際にどう考えどう行動しているかを知りたくて
も、タイムリーな文献が見あたらないのである。

団塊世代、72%が 65 歳以降も仕事継続希望 —2012 年調査

そこで、最近の動向を把握するために、インター
ネットで資料を検索したり、友人知人にヒアリングし
てみた。

さっそく、ずばり、65 歳を迎えた団塊トップランナー
(1947 年生まれ)200 名と、その妻 100 名へ 2012

この時点ではっきりしたのは、

- ①人材不足に悩む多くのボランティア団体にとっ
て、リタイアする団塊世代への戦力としての期待、
- ②それに応えるべき、かれらのボランティア活動に
対する意欲もたかい、という 2 点であった。

現状をさぐる

事前予測では、団塊世代のボランティア希望者は
多い、とされていた。

では、現状はどうなっているか考えてみよう。

じつは、2007 年問題は、2006 年の高年齢者雇用
安定法改正などにより雇用や定年の延長がすすめ
られ、あまり表面化しないで終わった。

つぎに登場したのが、雇用延長を年金支給開始
年齢の 65 歳をリミットとすると、トップランナーがこ
の年齢になったときの「2012 年問題」である。

この問題は、2012 年に端を発し昨年 14 年までつ
づくので、その影響について書かれた資料は、わた
しの知るかぎりではまだ無いようだ。

年におこなった調査結果を、ホームページ検索で
みつけた。

それによると、65 歳以降も働くことについて、男
性の 72%が希望し、その妻の 75%も夫が働くこと
を希望している。

仕事希望の有無にかかわらず、調査時点での仕事
の決まり具合は、47.5%が決まり、29.0%がこれか
ら探すつもりである。

すでに決まったひとのうち、54.7%がフルタイム
勤務、40%が時短勤務である。

65 歳以降の生活の中心という設問に、趣味・スポ
ーツが 35%ともっとも多いが、仕事と答えたひと
が 24%いて 4 人にひとりが 65 歳以降も仕事中心
と考えている。

ボランティア活動(NPO 活動、地域活動)と答えた
ひとは、5.5%だった。

(以上、電通総研「退職リアルライフ調査~団塊ファ
ーストランナーの 65 歳からの暮らし」)

この調査から、つぎの 2 項が読み取れる。

- ①60 歳以降も働いてきたかれら(1947 年生まれの
男性)は、65 歳以降も働いていたいと思っている。
- ②65 歳以降の生活の中心は、趣味・スポーツと仕事

を両立させたいと考えているが、ボランティア希望は少ない。

実際この報告を裏付けるように、このところわたしの周辺(テニス仲間)でも、「やっと、テニスをする時間ができました」とコートにやって来る65歳前後の男性が増えてきている。しかも、「NPOもやります」というひとは皆無なのだ。

変化している退職スタイル

この電通総研の調査報告に関連して、村田エイジング社会研究センター代表はつぎのような見解を述べている。

① 06年以降、60歳で定年退職して再雇用されて給料は半減するものの同じ職場で働きつづける、というスタイルが一般化した。

この就労スタイルは、完全離職とも完全現役とも異なる退職猶予期間となっている。

そのため、従来のような退職を機にすべての生活が一変するということが起こりにくくなっている。

幻想か？わたしたちの期待

この結論は、団塊世代はいまどこで何をしているか、という疑問を考えるのにとっても参考になると思う。

ボランティア・NPOの世界でも、潮流は同じなのだろう。

わたしたちは、かれらの定年とともに、多くのひとがNPOに老後の活躍の舞台を求めてやってくると思っていたが、どうやらそれは幻想というか現実的ではなかったようである。

団塊世代 A 氏の考え方

つぎに、わたしと交流のある団塊の世代の意見をきいてみた。といっても、前述したように周辺には、テニスや地域活動などをやっているポジティブな人々が多いので、一般的な意見ではないかもしれないが、そのひとつとして A 氏の考え方を紹介したい。

A 氏は、61歳で退職した。ポートフォリオを勉強して老後の資金見通しをしっかりとつけてか

② 65歳以降も働くことを、1947年生まれの男性の72%、その妻も75%が希望している点が従来見られなかったことで注目される。

「65歳以降にすべきこと」という設問への回答の上位2番目に「節約・倹約」があがっていることと合わせると、経済情勢や先行き不透明感を反映したものと考えられる。

定年後は趣味を中心に余生をすごすいわゆる「ハッピーリタイアメント」と呼ばれる悠々自適型の退職スタイルは、過去のものとなりつつある。

(以上、「村田裕之の団塊・シニアビジネス・高齢社会の未来が学べるブログ」)

村田コメントは、「5年前とどう違う？団塊世代、退職後の消費行動」というビジネスがテーマのものなので、結論は「今回の電通の調査は、退職という一代ライフイベントの時期が分散化し、相対的な位置づけが下がることで、過去大きな塊で市場を作りだしてきた団塊世代もその消費行動がますます多様化していることを示すものだ」としている。

ら、すこし早めではあるがリタイアした。

年寄りだから出来ること、若い世代の時には絶対出来なかったことをやりたいと思った。

【A 氏の生活スタイル】

毎日一菜園、週5日一テニス、週1日一コーラス、月2~3回一絵描き、月2回一音楽会鑑賞、随時一オヤジバンド、読書一昨年180冊読破、時間がとれば一海外にいる孫の世話

一見、好きなことを自分中心でやっていて、ボランティアなどと縁がないようなので、その点をきいてみた。すると、社会貢献もやるべきと考えているので、オヤジバンドとして、福祉施設の慰問や地域のイベントへの参加をおこなっている。

また、音楽会は奥さんの趣味だが、ふたつの交響楽団の月例演奏会に毎回チケットを買って行くことによって、ささやかながら芸術への支援もやっているつもり、と回答があった。

NPOは視野にないのか聞くと、とてもそままで手がまわらない、とのことであった。

A 氏の考え方をきいて、また新しい発見があったと思った。

10 年前の調査でみられた、団塊世代の 6 割以上が退職後なんらかの形で社会的役割を持ちたいという希望を、老後の生活のなかでちゃんと果たしているではないか。これは、これでいいと思った。

わたしたちは、社会貢献を、ボランティアだ NPO だと大上段に振りかぶりすぎているのかもしれない。

行先に困っている団塊世代も

一方で、丹羽伊藤忠商事前会長は「リタイアした団塊世代は社会貢献を」という記事で、「企業を定年退職した団塊世代が、図書館や喫茶店などで所在なげに過ごしているのを最近、よく見かける。

実際、商社で定年退職した後輩たちに「昼間は何をしているの？」と尋ねてみると、図書館で本を読む、無料の講演会を聞きに行く、自治体のカルチャーセンターに行ってみる、貸農園で農作業をしている——。こんな答えが返ってくる。」と、

行先に困っている団塊世代の存在にふれている。

(以上、日本経済新聞 2015 年 3 月 11 日)

また、昨年母の介護で世話になったケアマネジャーは、わたしの歳をきいて「わたしよりより年下の世代（つまり団塊世代）に、最近引きこもりや介護の相談がとて増えている」とっていた。

冒頭に紹介した堀田力氏の講演参加者の感想である「心は地域で絆や人間関係を求めているのに、それが出来ない団塊世代が一番孤独でかわいそうです。」という言葉も、意味ふかいものがある。

こうした、団塊世代のいわばネガティブな部分の対応について、「高齢社会白書（平成 25 年版）」では、自分がやりたいと思う活動が見つけれられるような支援（地域活動についての情報提供、出会いの場の提供、社会参加希望者の積極的活用など）があれば、社会活動への参加は進むものと考えられる、としている。



わかってきたこと

以上により、「NPO に姿を見せない団塊世代は、いまどこでなにをしているのか？」という疑問について、いまも働きつづけている、10 年間にわたってなしくずしに退職しているので変化が見えにくい、自分の世界で社会貢献をしている、ボランティアしたくても接点が見つからない……等々、理由らしきものがおぼろげにもわかってきたような気がする。

CSN は、後継世代を育てるため、今年度の方針として現会員の関係者に新規加入を呼びかける取り組みをはじめたところである。

しかし、その対象となる団塊世代の状況は、当初の予想とおおきく変化してきていることもわかったので、それに応じた作戦が必要であろう。

座して待っていても、かれらはやってこない

たとえば、そのひとつとして、ソーシャルビジネスも有効と思われる。

彩の国さいたま人づくり広域連合のホームペー

ジに「シニアの地域貢献を支援するソーシャルビジネス」という興味深い記事があった。(有)アリア代表の松本すみ子氏という方の講演要約である。

「まだ、社会とつながってほしい」「でも、何をしたらいいかわからない」「ボランティアだけでは物足りない」「お金も稼ぎたい」と思っているリタイアしたばかりの団塊世代は、ソーシャルビジネスの担い手として非常に期待されています、という内容である。

CSN も、だいぶ以前から NPO の生きざまとしてソーシャルビジネスに注目してきている。この手法をもっと活かさないだろうか。

座して待っていても、かれらはやってこないことがわかった。

団塊最終ランナーの 49 年生まれもすでに 66 歳。いま一歩が踏み出せない団塊世代に、いくつもの選択肢を提示して、こころに抱いていた社会参加への意欲の現実化を支援する最後のチャンスであろう。

□ 事業報告 □

町会で“DCM”の取り組み

手代町での防災講演会

埼玉県草加市手代町において、2月21日（日）自治会の総会に先立ち、防災の勉強会が、開催された。

辻田代表が講師として招かれ、『地域の防災力向上の新しい取り組み』と題して、約1時間の講演を行った。

手代町は、千葉県・東京都との県境から1～2kmの埼玉県南西部に位置する静かな住宅街であるが、住民有志による防災部会の立ち上げ、マンホールトイレを設備した防災公園など、町の“防災資源”も比較的充実しており、住民の防災意識も高く、当日、会場の草加市社会福祉活動センターは、100数十名の参加者で、椅子席が不足する程であった。



満員になった講演会

従来、防災の講演では、防災マニュアル・防災備蓄品などのテーマが多いが、当日の講演では、“DCM”の取り組みという、一般住民には、まだ聞きなれないテーマについて、『まず意識改革から』『正常の偏見』『準備していないことはできない』『地域防災活動こそ、“まちづくり”そのものの活動』など、とても判り易く解説され、手代町のこれからの“まちづくり”活動に大いに参考になったものと確信している。

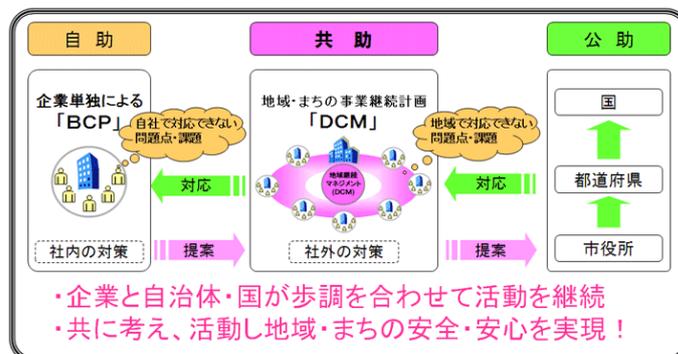
後に控える、総会スケジュールの関係で、質疑応答の時間がカットされたのは、少し残念であったが、熱のこもった“あっという間の”一時間であった。

（小川慶作記）

DCM の概念

（一般社団法人 DCM 推進協議会のホームページより）

□ 災害に強い「地域・まち」となるための最も実現性の高い、最も効果的な方法をとります。地域の声(要望)を自治体・国へ届けることにより



□ 活動報告 □

平成 27 年度第 12 期総会報告

会員を拡大して、次世代へ事業継続を

開催日時：平成 27 年 4 月 13 日(月)

15 時～16 時

会 場：国立オリンピック記念青少年センター
104 号会議室

第 12 期（平成 27 年度）の CSN 総会は、正会員 17 名のうち 16 名（うち委任状 8 名）の参加で開催された。

総会は、議長に宇佐副代表、書記鈴木理事、議事録署名人に辻田代表・高橋理事を選出し、総会次第にしたがってすすめられた。

開催にあたり、辻田代表理事より、つぎのあい

さつがあった。

「新年度の活動は、従来の活動に加えて地方自治体への技術支援事業に重点をおきたい。

新設のシビル NPO 連携プラットフォーム（CNCP）の立ち上がり事業にも協力する。

昨年来の課題として、会員の高齢化、我々の理念を継いでくれる若い世代の発掘があるが、会員の友人知人に参加呼びかけをしたところ、2 名のご参加をいただいた。」

つづいて、審議に入り、審議事項は議案書通り承認された。



平成 27 年度 CSN 総会出席者

第 19 回 CSN サロンのご案内

日 時：平成 27 年 7 月 13 日（月）15:00～17:00
17:00～ 懇親会「レストランとき」

会 場：国立オリンピック記念青少年総合センター
センター棟 104 会議室（小田急線参宮橋徒歩 5 分）

講演テーマ：「歴史を学ぶとビジネスの発想が変わる」
講師：平井 光之氏

サロン参加費：会員およびシニア・AD 無 料
一般 1,000 円

□ トピックス □

新設組織へ、いただく期待は各人各様

CNCP 会員 意見交換会の報告

土木学会を母体に創設された NPO 法人シビル NPO 連携プラットフォーム (CNCP) が発足して 9 カ月が経とうとしています。

わが CSN は、法人正会員として登録するとともに、辻田代表が常務理事として事業化推進部門を担当しています。

この間、法人正会員 20、個人正会員 21 および賛助会員 30 の合計 71 の組織および個人が会員登録しました。

会員に対しては毎月 CNCP 通信を発行して活動の状況の発信に努めています。しかしながら会員の意見については同通信で発表していただく場も設けていますが、十分なものとは言えません。

あり、事業化推進部門の担当理事として当 NPO の代表の辻田から「地方自治体への技術支援事業」について説明が行われました。

各部門の説明が終了後に CNCP の活動に関わる様々な意見交換感が活発に行われました。

はじめての意見交換会であったために参加者の CNCP に抱く思いもそれぞれで、各人各様の違いが浮き彫りになった印象でした。

このような状況を踏まえて、定期的な意見交換の場を設けることを検討し、今回その創設も含めて平成 27 年 2 月 10 日(火) 5:30~7:30PM ちよだプラットフォームスクエア において会員 40 名が集い意見交換会を開催しました。

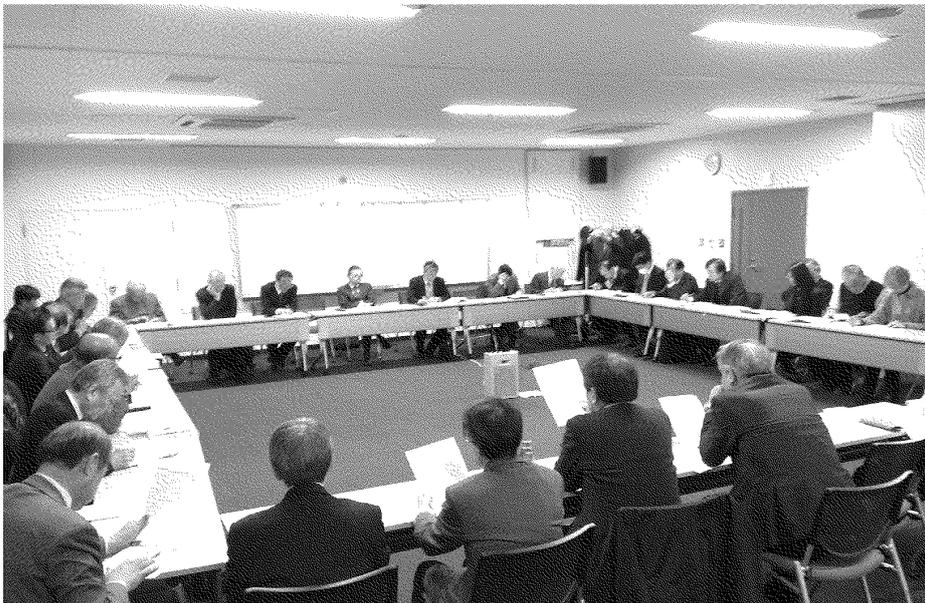
冒頭、山本代表理事の挨拶、内藤事務局長から CNCP の法人正会員の活動状況の説明がありました。続いて駒田理事から土木学会 100 周年記念出版の一環として発行された「インフラ・まちづくりとシビル NPO—補完から主役の一人へ—」の概要が紹介されました。

その後、地域活動推進部門、サービス提供部門の担当理事から各部門の活動トピックスの説明が

今後、メンバーの想いのベクトルを揃いつつ一体となった活動をして行くにはまだまだ高いハードルを越えなければならないでしょう。

意見交換会の終了後、同スクエア 1 階の fune で 8 時から 1 時間程度、懇談会が開催されました。

(辻田 満記)



CSN のうごき

行事・イベント	実施日	参加者
事務局定例会議	2/4、3/2、 4/3	辻田、宇佐、高橋
シビルNPO連携プラットフォーム運営会議	2/10、3/10、 4/9	辻田
共創プラットフォーム研究会	2/20、3/24、 4/24	辻田、宇佐、高橋
第12期総会	4/13	会員16名
活動報告季刊誌第9号発行	4/30	

編集後記

- ◇ 巻頭言は、代表・副代表・事務局長の3者輪番で執筆している。今季号は小生の担当だ。
- ◇ 本号のテーマに、長年の疑問だった「NPOに参入してこない団塊世代は、いま何をしているか」を取りあげてみた。
- ◇ 本文に書いたように、現在進行中の問題なので、適切な資料やデータが少なく、まとめるのに時間がかかった。
- ◇ 内容は、あくまでも推論であり仮説としてお読みいただきたい。
- ◇ 800万人にのぼる団塊のリタイア後の動向分析と結論づけなど、とうていわが手に負えるものではないことがよくわかった次第である。

- ◇ CSN活動の記録に活躍したわがデジカメラが、酷使にたえかねて壊れてしまった。角度が変えられるモニター付きのミラーレスに買い替え、さっそくサックスをふく友人を撮ってみた。こんなふうに新緑をバックに取り入れる構図など、従来カメラでは考えられないことである。お腹のどっぴったオジサンとしては、じつにありがたい。



(事務局 高橋 肇)